



出発の準備に追われる友田享助さん(右)と協力者の青木洋さん=30日、大阪府田尻町の田尻港で

独りのヨット 太平洋渡れ

小型ヨットでの無寄港・無補給の太平洋横断を目指して、同志社大4年の友田享助さん(26)＝京都市中京区＝が8月2日、大阪府田尻町の田尻漁港マリーナから出航する。74年に手作りのヨットで日本初の世界一周に成功した青木洋さん(54)＝和歌山市＝が協力。田尻町の人々も応援歌を作ったり、前夜祭を開いたりして、町をあげて支援する。

寄港・補給なし 同大生、大阪出帆へ

米国サンフランシスコまでの約1万1300キロを64日間で帆走する計画だ。16歳の時に亡くなった父の遺産で2年前に購入した小型ヨット「朋友(For You)」1号(全長約8メートル、幅約2メートル)に乗り込む。友田さんは小学生のころから、ヨットマンの父に連れられて神奈川・湘南でヨットになじんだ。海へのあこがれが募り、父の死後、太平洋横断を本気で考えるようになった。大学入学後も帆走技術を独自に磨き、昨年5月には、ヨット界では有名な青木さんを訪ね、アドバイスを求めた。だが、「バカなことはやめなさい」とにべもなかった。「授業料を払う立場になれば、むげにはされまい」と3カ月後、田尻町で青木さんが主宰するヨットスクールに入学。嵐の夜を体験する沖繩本島

「何思うか、楽しみ」町あげ応援

大阪・田尻町あげ応援

一周の実習は、荒波で転倒して顔面を負傷しながら乗り切った。厳しい訓練を経て、日本で数人という全米帆走協会認定の帆走技術保持者の資格も得た。

青木さんは「冒険では失うものも大きい。彼の本気を見極めたかった」といい、今は後援会長として協力している。「友田さんの夢を共有して町も元気に」と、今年町制50周年の田尻町は、記念事業として応援イベントに取り組む。1日夕の前夜祭では、田尻漁協が作った応援歌「小舟の主へ」を披露する。

2日朝には、出航に合せて町民150人が3隻の漁船やヨットに分乗して海上をパレード。出航後は町立中学校の生徒が衛星電話で定期的に交流する。

友田さんは「港のみならず支えられている」と感謝しながらも、気負いはない。「太平洋の真ん中で自分ができることを考えるのか、到着した時どんな思いがこみ上げるのか。それが楽しみ」費用の300万円は貯金や後援会のカンパでは賸りきれない。米国到着後にヨットを売り、帰りの飛行機代を調達するつもりだ。カンパなどの問い合わせは、青木さんが会長を務める「友田享助太平洋帆走後援会」(07-24-65-81962)へ。